

学びの価値を実感する言語活動の充実

育成する資質・能力を明確にした「書くこと」の実践を通して

反町 京子

Enhanced Linguistic Activity for Acknowledging the Importance of Learning
-Through Writing Processes that are Clear in Qualities and Abilities to be Fostered-

Kyouko SORIMACHI

学びの価値 学力構造 学習過程 資質・能力 言語活動

1. はじめに

新学習指導要領が示され、教育現場における様々な改革が進み始めた。国語科においてもその枠組みは大きく変わり、新しい教育理念のもと「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の視点からの学びの充実が叫ばれている。

このような中で、私自身がとらえる、国語科における指導理念の根幹は「何のために」というゴールをしっかりと見据えた《価値ある学びを創る》ということである。この指導観に基づき昨年度は「主体的な学びを形成するプロセス」を追究した。

その成果と課題をふまえ、今年度は「学びの価値を実感する言語活動」について、資質・能力の育成に視点を当て研究を進めることとした。

昨年度の研究で述べた「学びの価値」とは、「学んでよかった」という満足感、「学んだことが役に立った」「問題解決する力が付いた」という達成感、成就感、「学びが社会のニーズにつながった」「自己の成長の確認になった」などの有用感をさしている。

そして、それは自身への信頼と生きることへの前向きな態度につながる一連の主体的な生き方であるとしてとらえている。

授業レベルで考えると、目的を明確にした指導により、学習者が「何のために」「どんな力をつけるのか」ということをしっかりと意識して学び進める言語活動である。それを意図的・

計画的に構成することで獲得できることが「価値」であると考えている。

本研究においては、まず国語学力の構造(私見)に基づき、育成する資質・能力をとらえ、実践の中で新しい学びの方向をつかむことを目指した。

なお実践は短大初等科の学生との授業実践であり、昨年の研究(主体的に学び進めるためのプロセスの追究)における学習者自身が自ら課題をつかみ、目的を明確にしながら主体的に学び進める学習過程を活用している。実践では各過程でつけるべき資質・能力をとらえ、個や集団への教師支援を中心に進めた。

2. 学力構造と資質・能力

【図1 国語科で育成したい学力】に示したものは2004.1月刊国語教育研究「学力構造を明確にした“意志ある学び”を創るに掲載した学力構造図である(一部修正)。私案ではあるが研究の前提としては「学力構造」のとらえを再確認したい。その上で資質・能力の全体像をとらえた。

学力構造を明確にすることは次のような点で重要であると考えている。

- (1) 育てるべき資質・能力が明確になる。
- (2) 単元開発に迷いが生じない。
- (3) 指導(学習)目標が明確になる。
- (4) 指導と評価が一致する。
- (5) 学力形成の系統をふまえた簡潔な指導案ができる。

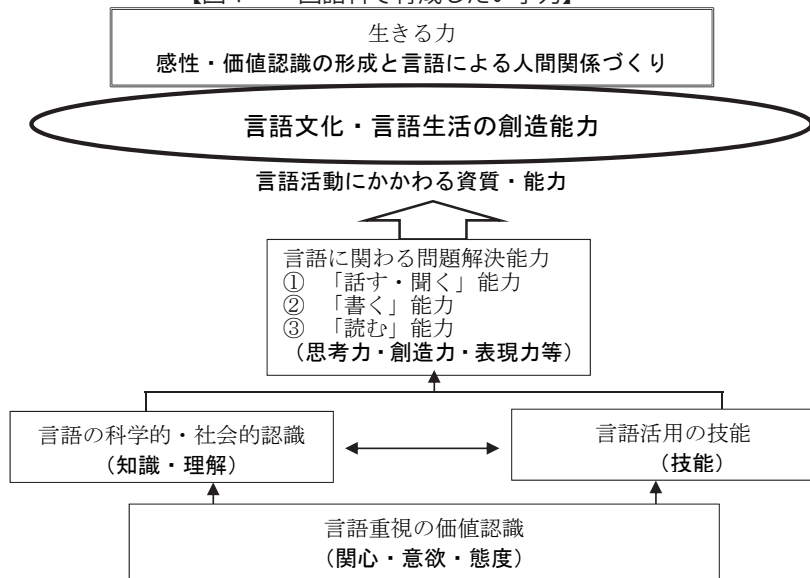
本稿においては(1)が中心である。学力構造図に示したように言語活動にかかわる資質・能力は大きく①言語に関わる問題解決能力(思考力・判断力・創造力等)②言語の科学的・社会的認識(知識・理解)③言語活用の技能(技能)④言語重視の価値認識(関心・意欲・態度)の4つにまとめている。

さて先に私案を述べたが、中央教育審議会は

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改訂および必要な方策等について」(2016 答申)の補足資料において、資質・能力の柱として、「知識・技能」、「思考力・表現力・判断力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3点を挙げている。

なお、私案との整合性については今後の研究としたい。

【図1 国語科で育成したい学力】



【表1 言語活動にかかわる下位能力】

言語活動	言語活用の技能	科学的・社会的認識	価値認識
① 話す・聞く	発想・認識 話題の選定 考え・意図 構成・論理 発表・話し合い 評価	話題・内容理解 意図の理解 論理・展開の理解 語句の選択・効果的な使い方の理解 主述・修飾等文法理解 共通語・方言・敬語等の理解	話題への関心 人間関係への関心
② 書く	発想・認識 主題・主張 取材・選材 構成 記述・推敲 評価・批評	客観的・主観的記述理解 事実・事柄、考えの記述理解 適切な材料の選材知識 説得力にある文章構成の理解 効果的な表現の理解 文章全体の統一性の理解	自立・自律意識
③ 読む	語句の意味・用法 内容把握・要約 構成・展開 表現 主題、要旨・論旨・意見 ものの見方・考え方 情報活用	語句の理解 文脈の理解 話の展開、文章構成の理解 効果的な表現の知識 表現の特徴の理解	作品の価値 情報への関心

* 太枠内は本研究「書くこと」の実践にかかわる能力のとらえ

学びの価値を実感する言語活動の充実

3. 学習構造と資質・能力

さらに、昨年度の研究で示した「主体的な学びを形成するプロセス」とのかかわりを考える【図2 学習構造と資質・能力】になる。

これからの時代が求める国語科の授業においては、この学びの過程に沿って、育てるべき資質・能力をとらえることが重要である。なお、さらに単元レベルで具体化した「国語科で育む資質・能力」については、平成28年5月31日教育課程部会国語ワーキンググループ資料1〈別紙2〉を参考にした。

以下引用である。

「国語科で育成すべき資質・能力」

〔知識・技能〕

○言葉の働きや役割に関する理解

○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け

・言葉の位相、書き言葉（文字）、話し言葉、敬語、方言

・語、語句、語彙

・文の成分、文の構成

・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章との関係）

○言葉の使い方に関する理解と使い分け

・話し方、書き方、表現の工夫

・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方

・話合いの仕方

○書写に関する知識・技能

○伝統的な言語文化に関する理解

○文章の種類に関する理解

○情報活用に関する知識・技能

〔思考力・判断力・表現力等〕

【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】

⇒情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力

・推論及び杞憂知識・経験による内容の補足、精緻化

・論理（情報と情報の関係性：共通―相違、原因―結果、具体―抽象等）の吟味・構築

・妥当性、信頼性等の吟味

⇒構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

⇒言葉によって感じたり創造したりする力、

感情や創造を言葉にする力

⇒構成・表現形式を評価する力

【他者とのコミュニケーションの側面】

⇒言葉を通じて伝え合う力

・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解

・自分の意思や主張の伝達

・相手の心の想像、意図や感情の読み取り

⇒構成・表現形式を評価する力

《考えの形成・深化》

⇒考えを形成して深める力（個人または集団として）

・情報を編集・操作する力

・新しい情報を、すでに持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力

・新しい問いや仮説を立てるなど、すでに持っている考えの構造を転換する力

〔学びの向かう力、人間性等〕

・言葉がもつ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で言葉がもつ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

・言葉を通じて自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとする態度

・様々な事象にふれたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度

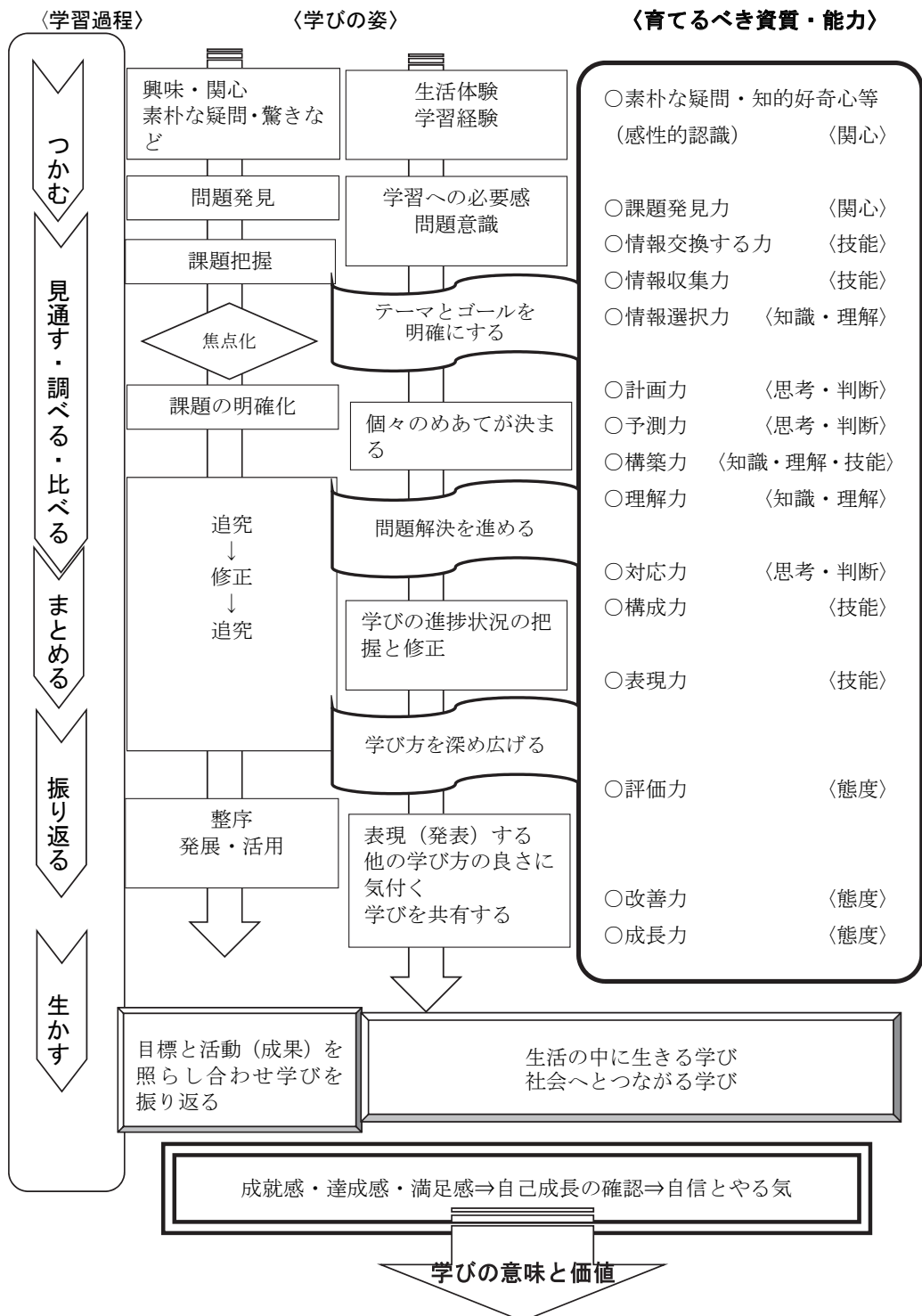
・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度

・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度

・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して、知らないことを知ったり、経験のないことを体験したり、新しい考えに出会ったりするなどして人生を豊かにしようとする態度

（平成28年5月31日教育課程部会国語ワーキンググループ資料1〈別紙2〉より）

【図2 学習構造と資質・能力】



4. 実践事例

実践は、平成 28 年度後期、短大の初等科学生に行った半期 15 回の授業から 3 事例を取り上げる。

—実践 1—

【自己紹介文を書く】1 コマ (90 分) で実施
(1) ねらい

＊紹介文を書くための知識や技能を身に付け自分の思いや考えを伝えることができる。

- ・ 自己紹介文を書くための手順を考える。
- ・ 紹介したい事柄を見つける。

◎ 取材・選材を練る。

- ・ 選んだ事柄から限られた時間で話そうことができるように精査する。
- ・ 比較、検討、再構成 (書き直し、書き加え) できる。

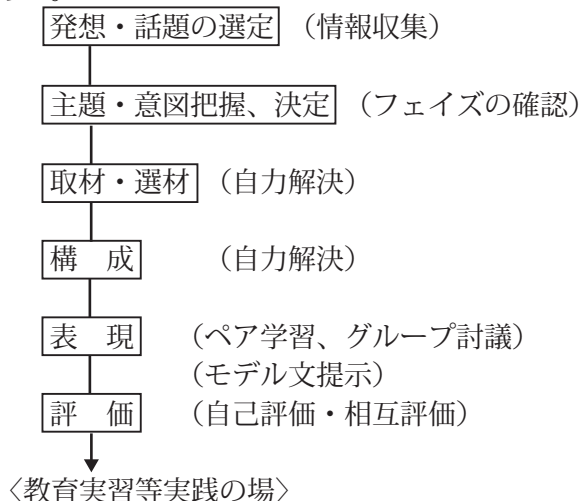
自己紹介は題材としては、身近であり、学生にとっては近く教育実習という現場での実の場もある。いろいろな場面状況はあるが、一応「限られた時間でいかに自己表現 (アピール) できるか、取材・選材 (材料集め) に視点を置いた。

したがって、育てるべき資質・能力の主眼を取材・選材の言語活用の技能とした。

(2) 言語活動について

この実践では、簡単な文章を綴るという活動を通して「書く」ことの意味を知るねらいを持ったものである。

言語活用の技能プロセスは、下記のとおりである。



(3) 活動の実際

初めに、「書く」という行為がどのような状況のもとに行われてきたのか既習経験を振り返った。(グループワーク)

「必要感」「材料」「成就感」の 3 点が重要であることが確認された。グループ討議で出ていなかった「書き方のスキル」については、全体的話し合いで確認し、「もの書き 4 ポイント」を作成した。

また、自己紹介文を「書く」行為は伝え合う力を育てることも目標となるため、従来の 5 つの言語意識「相手、目的、場面・状況、方法・技能、評価」についても説明を加えた。

実際に「書く」段階になると個人差があり、取材内容の有無にかかわらず、書き慣れている (文作の経験が多い) ことも大事な要素となっていた。

授業の後半で実際に書いた文章を互いに紹介した。その際「書く」ことについての目標は明確であったので学生は取材・選材について着目し自己評価、相互評価した。

リフレクションシートによる学生のふりかえりを見ると以下のような気づきがあった。

- ・ グループ内での紹介で、自分の取材で足りないことやよいことに気付くことができた。モデル紹介文 (ここでは参考作文として教師自身の紹介文を伝えた) が一番参考になった。
- ・ はじめ・中・終わりの大きなまとまりをとらえ材料をまとめればよいことが理解できた。
- ・ 声に出して伝えることでさらに自分の思いを伝えることができた。
- ・ 短い紹介文ではあるが、文字言語を音声化することの難しさと感じた。
- ・ 目あてをはじめに確認して書いたので、評価観点が明確で、取材・選材の力が大切なことが学べた。

(4) まとめ

400 字から 800 字程度の紹介文を書く活動で学生は、書くことの意味と価値を体得した。その際、有効であったのは、目あてを明確にしたことと、目あてに沿って活動し、評価したことだといえる。副次的ではあるが、教師のサンプル作文 (モデル文) の提示により再構成への

意欲の喚起と取材・選材のポイントをつかんでいる。

課題としては、「書く」行為は個々の主題によって目標がある。集団一斉での活動でねらうことと個別での活動のねらいは明確に分けるべきだと実感した。

—実践2—

【世界にたった一つの〇〇〇〇を作ろう】—教材づくりを通した単元構想—

3コマ(90分×3)で実施

(1) ねらい

◎教材として活用できる単元づくり

＊ことわざ・慣用句・故事成語を素材として我が国の言語文化に親しんだり理解したりできるようにする。

- ・ことわざ・慣用句・故事成語のおもしろさとよさを伝える。
- ・教材の価値が伝わるような、モデル教材(本、リーフレット、パンフレット、カード等)を作成できる。
- ・ねらいを明確にした指導案を作成できる。

この実践は、実際に「〇〇〇〇ブック」を作成することで自らの表現課題を設定した学びのよさと課題をとらえることを目的とした。最終段階では、目的を明確にした指導案づくりを組み込んだ。

(2) 言語活動について

ことわざ、故事成語を素材とした学習は、初等教育においては中学年の学習として取り上げることが多い。「〇〇づくり」という活動を組み入れることは、興味・関心という点で優れるが、ねらいにそって資質・能力を明確にとらえることで、はじめてその価値が意味づけられる。活動で終わらず、国語学力をつける単元として成果を期待するものである。

発想・話題の選定 (情報収集)

主題・意図把握、決定 (フェイズの確認)

＊作成にかかわる準備

取材・選材 (自力解決)(情報収集)
(メディア活用)

構成 (自力解決)

表現 (ペア学習、グループ討議)
(モデル文提示)

評価 (自己評価・相互評価)

↓
〈学習指導案づくり〉

(3) 活動の実際

学生が作成した作品は、「ことわざブック」が主であるがその内容は、「動物、干支、数字」等にテーマは様々である。

[学生作品の表紙(題)]

- ・ことわざブック～動物編～
- ・面白ことわざ読本
- ・ことわざを知ろう
- ・みんなで作ろうことわざブック
- ・数字に注目!ことわざ・四字熟語
- ・ことわざ・慣用句・四字熟語
～干支の動物版～
- ・世界にたった一つのアニマルブック
- ・四字熟語クイズ
- ・成功のことわざランキング
- ・4コマ故事成語
- ・ことわざカード
- ・〇〇さんのことわざブック

形式は「本」「ワークブック」「(かるたのような)カード」「4コマ漫画」「ランキング」など多様である。

(作品例A～C 参照)

また、書き込み式のワークブックやカード形式などの工夫も見られ、指導案ではそれらを生かした言語活動を組み込んでいる。(Aさんが作成した指導案例 参照)

[授業の概要]

- ①ことわざ・慣用句・故事成語について理解する。(現学習指導要領における位置づけ、および教材例等)
- ②活動の計画を立てる。
・実施単元を想定し、指導計画を作成する。
・モデル教材の活用を構想する。
- ③モデル教材を作成する。

学びの価値を実感する言語活動の充実

④中間交流として、作成途中でのグループ協議、情報交換、相互批評を行う。

⑤全体でシェアする。

- ・各自の成果物の発表

- ・自己評価、相互評価

＊学習指導案づくり（Aさんの作品及び指導案参照）

[リフレクションシートから]

- ・本づくりの工夫を学んだ。（理解力、表現力）
- ・まさしく十人十色、作品づくりを通して一人一人の個性がよくあらわれ、表現方法や取り上げる題材のよさを学び合うことができた。（計画力、構築力）
- ・グループ協議は情報共有だけでなく個人的には情報収集の場にもなった。一人で考えが行き詰まってもペア学習での経験から気軽に尋ね合うことができた。（意欲の喚起と持続、改善力）
- ・皆の作品を見て題材の違いはあるが、一様に子供へ対する温かな配慮を感じた。作品づくりは大変だったが、「取材」「構成」と新しい知識が増えて楽しかった。（理解力、成長力、達成感、親和感）
- ・作品を作る時、どのような工夫をしたら学びやすいのか、また自分が小学生の立場ならどんな作品が読みたいと思うかなど、考えながら教材づくりをした。（予測力、構成力）

どの学生も教材づくりの活動には熱心に取り組んでいた。進める過程において、既習の自己紹介文を書いた経験や、小学生用ではあるが作成の手順表、視点カードなどの資料やグループ討議やペア学習が有効であった。

作品の評価についても各人の発表後におこなったため、本人の指導の意図をふまえた温かなメッセージが多かった。相互批評することについては、さらにねらいを絞りの確に行う必要がある。

（4） まとめ

我が国の言語文化、特にことわざ・慣用句・故事成語などの意味を知り、活用できることをねらいとした単元構想が主眼であった。

そのねらいを達成するための、教材として活用できる本づくりを行った。

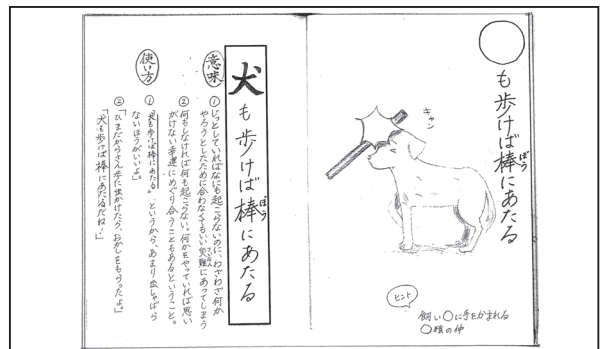
学生自身が教材づくりをしたことで、活動とねらい、評価がいかに深く関連しているのかを実感できた。

グループ協議は情報共有と学び合いに点から有効であり、学生は情報交換する中で内容や方法について考えを深め広げることができた。

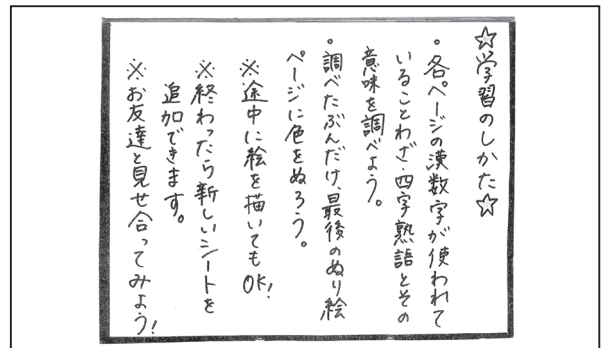
なお、新学習指導要領においては「知識及び技能」（3）我が国の言語文化に関する事項、第3、4学年伝統的な言語文化イに「長い間使われてきたことわざや慣用句の、故事成語などの意味を知り、使うこと」がうたわれている。

Aさんのモデル「ことわざブック～動物～」

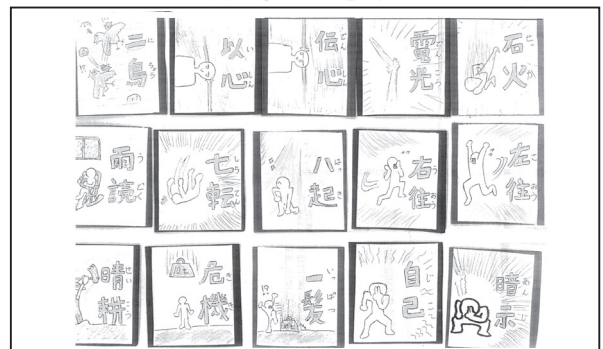
（モデルブックタイプ）



Bさんのモデル「数字に注目！ことわざ。四字熟語ブック」（書き込み学習シートタイプ）



Cさんのモデル「慣用句かるた」（かるたタイプ）



Aさんの考えた学習指導案例

—日本の文化に親しむ「故事成語」「ことわざ」—

指導目標 ことわざや故事成語について知り適切に使う（＊中学年対象）

1 単元名

日本の文化に親しもう—ことわざブックを作ろう—

2 単元の目標

- ・受け継がれてきた日本語の表現の豊かさを理解し、普段の生活場面に生かそうとしている。
- ・ことわざや故事成語の意味を知り作品づくりをする。

3 単元の計画（5時間扱い）

第1次—故事成語・ことわざについて知る。（1時間）

第2次—テーマを決め、必要な情報を集め、構成し、故事成語・ことわざブックを作る。（3時間）

第3次—出来上がった作品を紹介し、交流する。（1時間）

4 本時の指導

【5時間扱いの1時間目】

（1）目標 故事成語、ことわざなど長い間使われ親しまれてきた「言葉」について考える。

（2）展開

過程	学習活動	指導上の留意点（○）評価（★）
導入	1 ことわざや故事成語の例示を見て、これから学習する言葉との出会いを考える。 ・「犬も歩けば棒に当たる」はどんな「ことば」なのか考える。 ・学習のゴールとしてオリジナル作品をつくり交流し合うことに意欲を持つ。	○事前に作ったモデル本を示し、ことわざへの興味をもたせる。 ○ことわざは日本人が昔から生活の中で使ってきた言葉であることを説明する。 ★積極的に感想を述べ興味関心をもっているか。
展開	長い間使われてきた「ことば」について考えよう。	
	2 知っていることわざを発表する。 ・	○自作教材を提示することで「おもしろい」、「もっと知りたい」などの気持ちをもてるようにする。

【5時間扱いの3時間目】

（1）目標 前時までで作成した組み立てカードをもとにことわざブックの構成を考える。

（2）展開

過程	学習活動	指導上の留意点（○）評価（★）
導入	1 前時まで学習をふりかえり、本時のめあてを確認する。 ・ことわざカードから組み立て表をつくる。	○ ことわざカードに必要な情報が集められているか確認する。 ★必要な情報が集められているか。
展開	2 学習のめあてをつかむ。	
	言葉のよさが伝わる「ことわざブック」の組み立てを考えよう。	
	3 ことわざカードを整理し、「ことわざブック」のテーマや組み立てを構想する。 ・どのことわざを選ぶか ・どのような解説にするか	○自作教材（モデル本）を提示し完成のイメージをもてるようにする。 ○学習シートを工夫し、効率的に組み立てができるようにする。

学びの価値を実感する言語活動の充実

	<ul style="list-style-type: none"> ・表現方法は本、かるた、ワークシートなど、目的に応じて選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ○表現方法はテーマに応じて考えるように伝え、目的に合った形が選べるように助言する。 ★目的に合った構成が考えられている ○まだ構成の段階ではあるが、友達作品づくりの工夫から自分の今後の活動に生かせることを学ぶ。 ○発表の際、良いところがどんな点でよいのか、改善点はなぜそうしたほうがよいのか理由や考えを言えるように助言する。
まとめ	4 グループ内で構成を発表し意見交流をする。 ・友達のよい点や工夫している点、及び改善点について感想を述べ、意見やアドバイスをする。 5 全体で話し合いで出た良いところや改善点を交流する。 6 次時の見通しを持つ	

—実践3—

【日本語は大丈夫—テーマ討論、小論文づくり】90分×3コマで実施

(1) ねらい

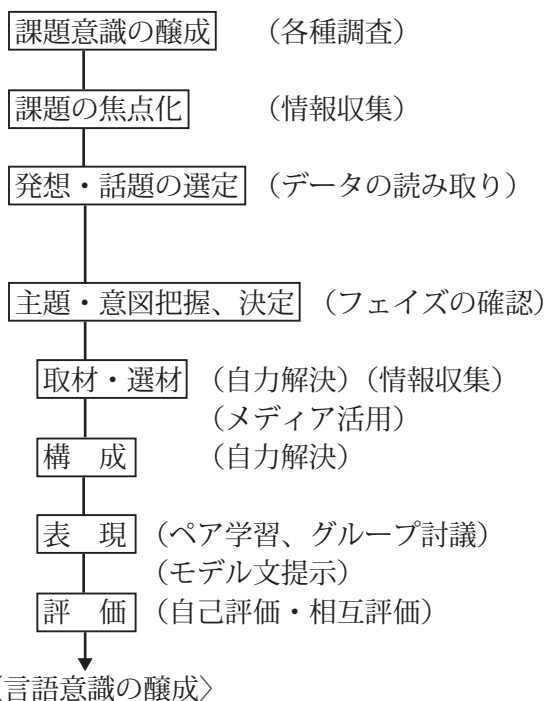
- ＊共通資料（平成27年度「国語に関する意識調査結果」）の読解をもとにグループごとにテーマを決め討論し、発表を通して考えを深めたり新たな視点を持ったりする。互いの発表を聞き各自テーマを決め、根拠を明確にした小論文を書くことができる。
- ・自分の経験や新聞、テレビ等のメディア情報などを活用し、客観的な裏付けをもつ小論文を書く。
- ・伝えたい事実や事柄を明確にし、文章構成を工夫することができる。

この実践では、資料の読解にグループ討議を組み込んだ。それは、学生一人一人は問題意識も薄く、必要感を感じていない『言葉』の現代課題*¹について意見交流することで課題に気付き、さらに全体発表による情報交換で考えを深めたり、新たな課題についての発見があったりするからである。調査結果を論拠としたグループ討議での学び合いや新聞記事などの情報も併せ、一連の過程を通して説得力のある小論文作成を実体験することができる。さらには今まで気づかなかった課題について追究することで、どちらかというと受け身であった（意識しなかった）「国語」教育の『言葉』そのものに対して興味関心を深め、その必要性を今の立場（学生）でとらえておくことができる。この経験は、将来教育現場に立った時の指導につながるはずであると考えた。

*¹については、別の講義で既習（詳細略）

(2) 言語活動について

前項ねらいで述べた通り、情報活用能力と交流を通じた話し合いによる論の練り上げ、および思考の深化の確認、その上で根拠を明確にした「書く活動（小論文）」を通して、その価値を体験的につかもうとしている。



(3) 活動の実際

共通資料等の読み取りから話し合われたグループテーマは下記のとおりである。

【グループ討議】

- ・SNSが日本語に与える影響
- ・掛け違える敬意表現
- ・日本語を大切にしているか（SNSの問題）
- ・取り巻く世界から受ける教養（絵文字、略語等）

それぞれのグループにおいて伝えたことは「テーマを絞り、話し合いを通し解決の方向をつかむ」ということだけである。大学生の課題追究授業では学生の今までの既習経験を生かし主体的に進めることを示唆した。

その結果、テーマを決めた後はそれぞれがテーマについての課題を出し合い、十分な結論とまでは言えないものの個々に考えを深め、まとめることができた。共通の課題としては、次のことが話題になった。

【今後の課題（話題として）】

- ・情報機器の進化と情報発信者としての自覚
- ・情報手段の多様化による表現の広がりや依存
- ・年齢層による意識の違いによる日本語の乱れ
- ・教育現場での指導のあり方（期待）
- ・言語環境とコミュニケーション

これらのことについては、さらに情報収集が必要であり、時間的な問題で解決の方策までは出せなかった。学生自身は、この活動を通して話し合いによる考え方の違いを知ることや、自身の考えの変容が意識されることの大切さを実感している。

次に、一人一人が個人テーマを決め800字に意見をまとめる「書く」活動をした。それらクラス全員小論文は冊子としてまとめ、最終的には一人一人が自分の意見を全体の前で主張した。（プレゼンテーション）

【Dさんの小論文】（原文まま記載のためアンダーラインは誤用）

文題「敬語表現の課題と取り組み」

『近年では敬語表現が軽視されつつある傾向にある。文化庁発行の平成27年度「国語に関する世論調査」の結果の概要では、敬語の必要性やその使い方について、全国の16歳以上の男女約40人にアンケート調査を行った。データを見ると、敬語はどうあるべきかという問いに対し、平成27年度は全体の約7割が、敬語は伝統的な美しい日本語として豊かな表現が大切にされるべきだととらえていることがわかる。平成9年度の約5割と比べると少しずつ増加傾向にある。

しかし、その一方で、テレビやインターネットの影響だろうか、若者が敬語を正しく使えなくなっている。その原因の一つに現代の生活環境が挙げられる。核家族化の中で、敬語を学び、使う機会が減ってきているのではないか。私の母が幼少のころは、祖父母や両親、両親の兄弟とその家族など同居したり、親せきや地域とのつながりも強く、目上の人と接する機会が多くあったという。敬語を使うことが日常的に行われていた。このことから、若者が正しい敬語を知らないのは使う環境におかれていないと考えることができる。

だが、若者に正しい敬語表現を使わせたいからと言って、昔のような生活環境を復活させることは不可能だ。現代においては、敬語を使用したり、学ぶ機会を意図的に増やしていくことが必要だと考える。

そのために、学校現場は責任の一端を担っていると思う。まずは教師自身が児童の模範となるよう敬語を正しく使うこと。さらにどの場面で使うべきなのか体験的に学ばせる機会を作ることが必要だ。敬語は動作主や聞き手に敬意を表す言葉であり、上手に使えば良好な人間関係を築くことができる。正しい敬語を教えることが学校教育における重要な一要素であることを再認識した。』

この小論文は400字原稿用紙2枚の最終行までを使い、ほぼ規定に沿った字数と内容であると思われる。字数制限がなければ具体的な事例を挙げ現場の実現可能な教育活動を提案したり、本人自身の決意のような事柄も加えたりすることができる。構成も、「事実—原因の追求—考え—提案—主張」となっており、「書くこと」で伝えるよさ（学びの価値）をとらえているといえる。

（4）まとめ

学生のリフレクションシートには「800字にまとめるのが難しかった」「伝えたいことをどんな構成で書けばよいか悩んだ」という活動に対する戸惑いの様子から「本を引用するので

学びの価値を実感する言語活動の充実

はなく自分の考えを文字にすることでこんなにも個性が見えてくるのかと驚いた」「なぜそのような調査結果となったのかを追求することで問題点が浮かび上がり、解決策についても書くことを通して自分なりにまとめることができた」「小論文にしたことで、普段あまり気に留めていなかったことに対して問題意識を持ち調べ自分なりの考えを持つことができた」などの今までには経験のない深い学びの姿も見られた。

5. 考察

実践を通して、学びの価値を実感するためには、まず、学ぶ目標が学習者に確実に理解されていることが重要である。次に、各学習過程における、適切な支援により学習意欲を喚起し、モチベーションが持続されることである。そして学習の結果を適切に評価し、改善向上を図ることの繰り返しにより学習者自身が実感することになる。本研究においてこの一連の方向を示した。これは、学びのサイクル「PDCA」を単元レベル（題材によっては毎時）で行い、積み重ねていくことに他ならない。

「書くこと」の実践を通して検証したが、資質・能力を明確にした学びは、言葉の教育としての国語科の「学びの価値」を捉えることに重要にかかわっている。

しかし、学生が本当に学びの価値を実感するのは、ここで得たことが教育現場で生かされて、指導者として子供たちにその成果が表れた時であろう。

追跡調査をすることができればありがたい。

6. おわりに

時代の変遷による教育の動向はめまぐるしく変化している。新学習指導要領における資質・能力のとらえを明確にした学びは、新しい枠組みの構想として現場の教育活動にも大きな変化をもたらすことであろう。その変化に鋭意果敢に取り組む教育現場が、子供たちの未来を支えている。

子供たちが多様な言語活動を通して学ぶ価値をとらえ、自分自身の生き方をつかみ、たくましく育っていくことを願っている。

【参考文献】

- ・文部科学省「学習指導要領解説 国語編」(2008) (2017)
- ・教育課程研究会編著「アクティブ・ラーニング」を考える(2016) 東洋館出版社
- ・千葉市教育センター 研究紀要「確かな学力の育成に関する研究Ⅲ」(2015)
- ・田近洵一・牛山恵編集「子どもと創る国語科基礎・基本の授業」国土社(2003)
- ・千葉県総合教育センター「学習意欲を高める指導法に関する研究Ⅱ」(1994)
- ・日本国語教育学会編「国語教育研究」No. 255(1993) 実践研究—関心・意欲・態度を育てる単元学習の工夫 反町京子
- ・日本国語教育学会編「国語教育研究」No. 381(2004) 提言—学力構造を明確にして“意志ある学び”を創る 反町京子
- ・ことばと教育の会編「国語教室宣言」国土社(1995)
- ・千葉市立本町小学校「ポートフォリオを生かした新しい教育実践と評価」東洋館出版社(2001)
- ・初等教育資料「生きる力を育む教育の新たな展開」東洋館出版(2010)
- ・文部科学省「小学校キャリア教育の手引き」(2011)
- ・文部科学省、国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査 報告書」(2016)
- ・文部科学省中央教育審議会 答申(2016)
- ・文化庁「国語に関する意識調査結果」(2015)